十八　読書と車が大好き　横綱大鵬を育てた

けいこの虫　名大関　佐賀ノ花（一九一七～一九七五）

昭和三十七年（一九六二）の秋、佐賀市の日新小学校に新しい土俵ができました。そのお祝いの土俵開きに、愛弟子の横綱大鵬と一緒に元大関佐賀ノ花がやって来ました。当時、佐賀ノ花は二所ノ関部屋の親方で多くの弟子を持っていました。子供たちは歓声をあげて親方と横綱を取り囲みました。佐賀ノ花親方はこの日新小学校の卒業生だったのです。

佐賀ノ花は明るくはしゃぎ回る子供たちをながめながら、自分の少年時代や大相撲に入ってからのことなどを思い出していました。

佐賀の花は大正六年（一九一七）、佐賀市西魚町に生まれました。本名北村勝巳といいます。勝巳の小学校時代は、ちょうど※世界恐慌と呼ばれる世界中が大変な不景気に苦しんでいる時代でした。

そのころ、日新小学校はスポーツが大変盛んで、特に相撲は全校をあげておこなわれていました。勝巳が四年生の時には、「相撲体操」という相撲の型を取り入れた体操もつくられ県内外で評判になりました。現在、この相撲体操をする二人の少年の銅像が「少年の像」として校庭に立っており、学校のシンボルになっています。学校を中心に校区を二分しての東西対抗相撲大会はみんなが夢中になりました。勝巳はからだが大きく強かったので六年生の時には東の大将になり、自分よりもからだの大きな西の大将を熱戦のすえたおしま

した。二人の対戦は今でもその当時を知る人たちの語りぐさになっています。

そのころの子供たちは学校から帰ると学年が違う友だちと一緒に遊んだり、いたずらをしたりしていました。勝巳は遊びもよくしましたが、絵をかくのが大好きで、そのころ子供たちに人気のあった雑誌「少年倶楽部」などにのっている絵を熱心にかきました。

小学校を卒業したあと、兄が鹿島市にいましたので勝巳もそこで働いていましたが、昭和九年、十六歳の時、九州に巡業に来ていた横綱玉錦に認められ大相撲に入ることになりました。「大相撲に入れば東京に行ける、そうしたら東京で絵も描ける」と思いました。勝巳は出身地にちなんで「佐賀ノ花」という名前をつけてもらいました。からだの大きな者ばかりの大相撲ですから、身長百七十センチ、体重七十キロぐらいの佐賀ノ花は大きいほうではありません。「あのからだでは、あまり期待できない」と心配する人もいましたが、「期待できない」と言われて、かえって闘志がわき、けいこに励んだそうです。佐賀ノ花は昭和十三年の一月に十両になりました。これは大変なスピード出世だったそうです。

佐賀ノ花を育てた玉錦（(財)日本相撲協会所蔵）

しかし、この年、親方の玉錦が突然病気でなくなりました。玉錦の秘蔵っ子と呼ばれ人一倍かわいがられていた佐賀ノ花には大変なショックでした。二所ノ関部屋の十七代目の親方には兄弟子の玉ノ海がなりました。佐賀ノ花は二十

少年の像（佐賀市立日新小学校）

歳の若さでしたが、親方になった玉ノ海についで上の地位にいましたので、部屋をリードしていく重大な責任を負うことになりました。前にもまして稽古に励み、翌年には待望の幕内にあがりました。

そのころ日本は中国と戦争をしていましたが、やがてアメリカやイギリスとも戦争を始めました。そのような時代に佐賀ノ花の活躍は子供たちに夢をあたえました。子供たちは休み時間になると運動場に土俵を書いて相撲に熱中したそうです。「右四つ」から左を差して一気に寄りきる佐賀ノ花の相撲ぶりはなくなった親方の玉錦そっくりだと言われました。

昭和十九年の一月場所、佐賀ノ花は十三勝二敗の好成績で念願の初優勝をはたしました。戦争中なので今のように華やかではありませんでしたが、暗い時代の中、佐賀の人びとにとって、心をわき立たせる明るいニュースでした。そして、この年の五月場所後には、待望の大関にあがりました。しかし戦争はますますはげしくなり、佐賀ノ花が優勝した場所を最後に両国国技館は風船爆弾の工場になりました。そこで次の場所の大相撲は後楽園球場でおこなわれ、観客は鉄かぶとや防空ずきんで観戦したそうです。昭和二十年八月に戦争は終わりましたが、日本中があれはててしまいました。

戦後の復興がおこなわれていた昭和二十六年、佐賀ノ花は現役の力士のまま十八代目の二所ノ関部屋の親方になりました。親方になった当時は部屋の経営も苦しく、特に部屋の有力力士があいついで独立したり、引退したりして大変な試練の時代でした。親方は若い弟子たちを「力士には土俵の上にこそ人生がある。強くなってそれをつかみなさい。」と自分が師匠の玉錦にいわれた同じ言葉で励ましながら厳しいけいこできたえ上げました。

親方には、そのころ一つの夢がありました。読書好きの親方は中国の「荘子」という古い本に「鵬という北海のはてにいる背中が三千里（一万二千キロメートル）もある大鳥は、飛び立つとつむじ風に乗って九万里、六か月間飛び続ける」とあるのを知っていました。この雄大な鳥にちなんだ「大鵬」という名前を、手塩にかけて育てていた納谷という弟子につけ横綱を目指させることでした。大鵬は親方の期待どおりに昭和三十六年、二十一歳の若さで横綱になり大相撲の黄金時代をつくっていきました。

大相撲の社会は伝統を大切にしますが、ビルの四階に土俵を作りけいこ場にしたり、外国のオートバイや自動車に乗ったり、新しい風も送りこみました。

二所ノ関部屋は佐賀県出身者が多く、おかみさんも佐賀の人で、部屋では佐賀弁が通用し、佐賀部屋と呼ばれていたそうです。

自然に従い風や雪にたえながらまっすぐに伸びるような生き方を目指した親方の人生をみなさんはどう思いますか。